

7 ミセバヤ [天然記念物(植物)]

[所在地] 地域を定めず

[主な自生地] 吉野郡

[概要]

ミセバヤはベンケイソウ科ムラサキベンケイソウ属の多肉性宿根草で、和名をイキクサ（伊岐久佐）、タマノオ（玉緒）などともいう。学名は *Hylotelephium sieboldii* (Sweet ex Hook.) H. Ohba (syn. *Sedum sieboldii* Sweet ex Hook.) である。種小名の *sieboldii* は、フィリップ・フランツ・バルタザール・フォン・シーボルトが、この植物を日本国外へ紹介したことに因んでいる。花期は10～11月で、花序は散房状となって草茎の先端について球形をなす。花弁は紅色である。植物学および園芸学の記述において、「栽培逸出ではないと考えられるミセバヤは香川県小豆島の寒霞溪の群落が知られるのみであったが、1993年に奈良県でも確認された」と説明するものが散見する。それらの報告によれば、奈良県産のミセバヤは、それまで知られていたミセバヤとは葉序や葉柄の有無等に相違点があり、エッチュウミセバヤとの近似点も指摘される。その一方で奈良県産のものをヤマトミセバヤと仮称する見解もある。

歴史的には人々との関わりも長い。明治時代以前の別名として「費菜」・「景天」とも記され、『本草和名』（平安時代）に収録された「景天」がその初出であり、『松山本草』（江戸時代）には彩色挿絵も収録されている。江戸時代の随筆『花臈』・『譚海』・『閑窓自語』によると、和州金峰山などの深山に自生すること、鉢植え植物として広く愛好されたこと、吉野山の僧侶がこの花を和歌の師匠に見せたい（＝見せばや）と思ったことがこの名の由来であることを伝える。また『和州吉野郡中物産志』（江戸時代）によると、「費菜」はキリンソウ（ベンケイソウ科 *Phedimusaizoon* var. *floribundus*）のことであってミセバヤではないようだが、「景天」は「洞川二産ス」とも記す。

現在ではミセバヤの国内自生地が極めて限定的となっているが、奈良県においてはミセバヤと人々との関わりは本草学的にも歴史学的にも長く、深いことが記録されている。そのうえで現在も自生地が確認できることから、奈良県内のミセバヤの学術的な存在意義は極めて高いと評価できる。



ミセバヤ（開花の様子）